**「ラーマクリシュナの福音」勉強会　第６８回　（２０２０年１０月１１日）**

**・第６８回の勉強範囲：「第三章　ヴィディヤー・シャーゴル訪問」４０頁**

**（前回の補足）**

「ブラフマンとシャクティ（母なる神）は1つの存在の２つの姿」であると説明しましたが、それはシュリー・ラーマクリシュナについても言えます。

──白い服を緑に染めたいという人が染物屋に来て、店主はポットに染料を入れて緑に染めました。次に赤く染めたいという人が来て、店主は同じポットに染料を入れ、赤く染めました。別の人が来て青く染めたいというので、また同じポットに染料を入れて青く染めました──

シュリー・ラーマクリシュナはそのポットです。それは特別なポットではありませんか？　シュリー・ラーマクリシュナの元にはさまざまな宗教、さまざまな宗派、さまざまな哲学の人々が訪れました。彼らはシュリー・ラーマクリシュナと話をして、皆「シュリー・ラーマクリシュナは私たちと同じ考えの方だ」と思いました。二元論者は、シュリー・ラーマクリシュナは二元論的な考えの人だと捉え、非二元論者は、シュリー・ラーマクリシュナは本当に非二元論的だと考え、ブラフモー・サマージは、シュリー・ラーマクリシュナは私たちのグループの人だと考え、ヴィシュヌ派の信者は、シュリー・ラーマクリシュナはヴィシュヌ派の信者だと考えました。

しかし二元論者と非二元論者の考えはかなり異なるものです。普通はそれを合わせることはできません。ある宗教と別の宗教、ある宗派と別の宗派の場合もそうです。ですがシュリー・ラーマクリシュナは調和の化身（Prophet of harmony）です。すべてを調和して話をすることができました。そしてその話のインパクトがとても大きかった。なぜならみずからの実践によって悟った結果、「それらの考えは矛盾しない、調和することができる」という結論に達していたからです。ですから今私たちが『ラーマクリシュナの福音』を勉強しても、私たちにもとてもインパクトが大きい。もし学者が勉強と研究の成果で同じ結論を得たとしても、これほどの影響を与えることはできません。

**（今回の勉強）**

**📖『福音』４０頁上段　後ろから２行目**

*必要なのは神に専念すること──強烈にを愛することです。『甘露の湖』は不死の湖です。人は、その中に沈んでも死なないで不死になります。ある人びとは、神のことを考えすぎると気が狂うなどと言うが、それはほんとうではありません。神は甘露の湖、不死の海です。はヴェーダの中で、『不死なる者』と呼ばれています。それの中に沈んで死ぬことはありません。まさに死を超越するのです。*

*礼拝や供物や犠牲供養はあってもなくてもよい。*

**（解説）**

「*あってもなくてもよい*」というよりも、「なくてもかまいません」です。なくてもかまわない、ということを強調しています。最初の部分をもう一度読んでください。

（参加者）*必要なのは神に専念すること*

**「タット・ガタ」**

神に専念、神に没頭［＊専念＝専心、１つのことに心を集中すること；没頭＝１つのことに集中して他を顧みないこと］、それが今日の話のテーマです。英語ではabsorptionまたはimmerse。英語のゴスペルには「What is needed is absorption in God.」とあります。

ベンガル語では、チッタ・タットガタハ。チッタは心です。ヨーガ・スートラの「ヨーガ・チッタ・ブリッディ・ニローダハ」［＊参考『パタンジャリ・ヨーガの実践』21頁］を思い出してください。

（板書する）Tatgata ＝Tat-gata

Tatgataはタットとガタの２つのサンスクリット語から成っています。多くのベンガル語の語源はサンスクリット語です。「タット」という言葉は聞いたことがありますか？

（参加者）ハリオーム・タット・サット。

（参加者）タット・トワム・アシ。

そうですね。タットは「そのもの」「あるもの」という意味です。だから「タット・サット」の意味は「そのものがサットです」。すなわち「そのものは永遠です」「そのものは絶対の存在です」「そのものはサット・チット・アーナンダ／絶対の存在・絶対の知識・絶対の至福です」ということです。それを「タット・サット・チット・アーナンダ」とは言わず「タット・サット」と言っているのです。前後関係でサットがブラフマンを意味したり、神を意味したりもします。

「タット・トワム・アシ」はウパニシャドを代表する４つのマハー・ヴァーッキャ（偉大な言葉）の１つです［👉協会HP→テキストギャラリー→ウパニシャッド2015年6月・8月］。トワムはあなたという意味で、師が生徒に向かって「You are That.」、つまり「あなたがそのものです」と教えているのです。すなわち「あなたの本性とブラフマンの本性は一緒」ということです。

『バガヴァッド・ギーター』にもあります。１８章の６５節を見てください。

*マン・マナー　バヴァ　マド・バクトー　マド・ヤージー　マーン　ナマス・クル / マーム　エーヴァイッシヤシ　サッテャン　テー　プラティジャーネー　プリヨーシ　メー//(18-65)*

「マド」と「タット」は同じです。マドは「私に」。その「私」とは誰？　シュリー・クリシュナです。

*常に私を想い、私を信じ、私に供養し、私を礼拝しなさい。そうすれば、君は必ず私のに来られる。君は私の信愛の友だから、そのことを君に約束する。(18-65)*

このクリシュナは人間クリシュナではありません（『ギーター』の学びにおいて重要なことは、語っているのは人間クリシュナではなくて神の化身だということです）。クリシュナはヨーガの状態（神と一つになった状態）に入って話をしています。だからこの「私」は人間の私（クリシュナ）ではなく、ブラフマンです。すなわちマッド（私）とタットは一緒です。

同じ内容が第９章の３４節にもあります。とても大事な助言なので繰り返されています。

*マン・マナー　バヴァ　マド・バクトー　マッデャージー　マーン　ナマス・クル / マーム　エーヴァイッシヤシ　ユクトヴァイヴァム　アートマーナン　マト・パラーヤナハ//(9-34)*

*常に私のことを想い、私の信者として、私を供養し、礼拝するがいい。君が私を最高の目的とし、常に君の心を私に結び付けているならば、君は必ず私のもとへと到達する。』と。*

**「タットガタ」（専念・没頭）の対象が何か、が重要**

ガタの語源はガム、「行く」という動詞です。「タットガタ」の意味は「行って戻らない」となり、それを日本語で言うと「専念」「没頭」となります。私たちは瞑想のとき、心を神に向けようとして一度はそう出来ても、また他の世俗的なものに戻ってしまいますが、そうではなく、心が神（ブラフマン）に向かったままそれに没頭し続けることが「タットガタ」、これはパタンジャリ・ヨーガのディヤーナにあたり、仏教ではと言われるものです。

私たちは世俗的な対象に没頭する経験は持っています。ですがシュリー・ラーマクリシュナが言うことは「神への」専念、「神への」没頭であり、私たちと対象が全く違います。ディヤーナの後はサマーディですから、「タットガタ」の状態はかなり実践が進んだ状態です。それができたら、別の霊的な実践や儀式はいらなくなります。

「タットガタ」のイメージを、まず世俗的なものに没頭する例から見ていきましょう。

　**・対象が世俗的な例**

**①：**『福音』にも出てくるジャドゥ・マリックの例です。神を信じ、シュリー・ラーマクリシュナを尊敬し愛していましたが、お金持ちのせいか、いつも自分の仕事や財産についてあれこれと考えていました。それは食事のときにも続き、味への気づきを持てないほどでした。食べているのですが、おいしいとかまずいとか、塩辛いとか塩が足りないとかにまるで気づかないのです。原因は心が仕事に行ってそこから戻ってこないからです。隣で食べている人から「今日のカレーは塩が足りないね」と言われて初めてカレーの味に気づくほど、彼の心は世俗的なものに集中していました。

**②：**私たちにもありませんか？　食事の直前まで仕事をしていて、５分で食事を済ませ、また仕事に戻るとき、食事中に考えていたことは、それまでの仕事とこれからの仕事のことです。

**③：**漁師の例。猟師は動物や鳥を殺して肉を売ったり自分で食べたりします。その日は鳥をターゲットに弓を引いていました。心はターゲットに集中し、近くで祭りが催され、さかんに楽器が演奏されているにもかかわらず、何も聞こえないほどでした。

**④：**魚釣りの例。魚釣りは池の魚をとるため集中して座っていました。その池は道の途中にあったので、通りかかった旅人が彼に「私は田舎に行きたいのですが、ここからあとどれくらいでしょうか？」とたずねました。しかし何度聞いても返答はなく、旅人はいらいらして行ってしまいました。丁度そのとき魚を釣り上げました。すると魚釣りははっとして、「ちょっとそこのあなた、何か私に言っていましたね？　何を言っていたのですか？　戻ってください、戻ってきてください」。旅人が戻って文句を言うと「すみません。私は魚を釣ることに没頭していて、何をおっしゃっていたのかまったく理解していませんでした」。

**⑤：**『ビルワマンガラ』は、シュリー・ラーマクリシュナの在家弟子、ギリシュ・チャンドラ・ゴーシュ作（・演出・出演）の物語劇です。とても有名なドラマで、シュリー・ラーマクリシュナも観に行きました。

──ビルワマンガラは、チンタマニという名の売春婦（シュリー・クリシュナの信者でした）をとても好きになりました。父の葬儀の日にも「彼女に会いに行きたい！」と思うほどぞっこんでした。葬儀が終わった頃には夕方となり、辺りは暗くなっていました。それにその日は台風のような暴風雨で、行く途中にはヘビが出そうな森や大きな川もありました。それでもビルワマンガラはそれらを一切気にせず、いそいそ彼女の元へと出かけたのです。途中の森では瞑想しているヨーギーに足がぶつかって怒られました。ビルワマンガラは言い返しました、「私はチンタマニのことだけを考えて他のことなど何も気にならないのに、あなたは瞑想しているにもかかわらず、外への気づきがあるのですね」。川岸に着くと、舟もなければも増していました。しかしビルワマンガラはそれをも気にせず、ただ１つだけ、「チンタマニの場所に行く！」とだけ考えて、泳いで川を渡りチンタマニの場所に着きました。着くとチンタマニは怒って叱りました、「あなたのそれほどの私の身体への執着を、もし神だけに向けたら、あなたは悟ることもできるのですよ！」。それを聞いたビルワマンガラはすべてを放棄して神だけを考えるようになり、そして聖者になりました。「あなたのグルはどなたですか？」と聞かると、ビルワマンガラは恥じらうことなく「私のグルはチンタマニです」と答えました──

　**・対象が霊的な例**

**①：**ヨーギーが集中して瞑想すると外界への気づきはなくなります。ヘビが自分の身体を這いまわってもヨーギーはそれに気づきませんし、ヘビも人間だと気づいていません。それほど環境や自分の肉体を忘れ、神だけに没頭しているのです。

**②：**ヨーギーが集中して瞑想すると外界への気づきはなくなります。エサを探すためにヨーギーのもじゃもじゃ髪に鳥がやってきてつついても、ヨーギーはそれに気づきませんし、鳥も人間とは気づいておらず、ただの物体だと思っています。ヘビも鳥も『福音』の例です。

　**・その実例**

**①：**ラトゥ（アドブターナンダジー）がシュリー・ラーマクリシュナのお世話のためにドッキネッショル寺院にいた頃の話。そのときラトゥは外界への意識がなくなるほど深く瞑想していました。ナレン（スワーミー・ヴィヴェーカーナンダ）はその集中がどれ位のものか知りたいと思い、ラトゥの近くでお盆を叩いてガンガン音を鳴らしました。それでもラトゥは気づかず瞑想に没頭していました。このことを知ったシュリー・ラーマクリシュナがナレンに「瞑想しているときに邪魔するではないよ」と言うと、ナレンは「瞑想に没頭していて意識がないのですから、音を出すことが何のお邪魔になりますか？　意識があるとき邪魔になるのです」と答えました。

**②：**スワーミー・ヴィヴェーカーナンダとギリシュ・チャンドラ・ゴーシュがドッキネッショル寺院のパンチャヴァティの木の下で瞑想していたときの話。集中が途切れたギリシュがふとスワーミージーを見ると、黒い毛布を巻いているかのように蚊の大群に身体を覆われているスワーミージーを見ました。それでもスワーミージーは瞑想に没頭していました。ギリシュはそのスワーミージーの様子を見て本当に驚きました。

**「タットガタ」の条件**

たった１匹の蚊が寄ってくるだけで、私たちは瞑想を中断して薬を取りに行きます。なぜ私たちには「タットガタ」ができないのか？　それはそれほど神を愛してないから、神への愛が深くないからです。『バガヴァッド・ギーター』の第１２章６節を見てください。

*イェー　トゥ　サルヴァーニ　カルマーニ　マイ　サンニャッシヤ　マト・パラーハ / アナンニエーナイヴァ　ヨーゲーナ　マーンデャーヤンタ　ウパーサテー//(12-6)*

「*イェー　トゥ　サルヴァーニ　カルマーニ　マイ　サンニャッシヤ*」、すべての仕事を捧げます。誰に？　「*マト・パラーハ*」、捧げる対象は私“だけ”、集中する対象は私（＝シュリー・クリシュナ、神）“だけ”。「*アナンニエーナイヴァ　ヨーゲーナ*」、別のことを全く考えず、私のこと“だけ”考える。これが「タットガタ」の状態です。［＊全体の翻訳：*だが私を最高目標と定め、すべての行為を私のために捧げ、常に私のことのみを想い礼拝する人達*］

第１２章８節を見てください。

*マイ　エーヴァ　マナ　アーダツヴァ　マイ　ブッディン　ニヴェーシャヤ / 二ヴァシッシヤシ　マイ　エーヴァ　アタ　ウールドヴァン　ナ　サンシャヤハ//(12-8)*

*それゆえ、常に私のことのみを想い、おのれの知性のすべてを私にゆだねるがいい。そうすることにより、君は疑いなく、これから常に私の中に住むこととなる。*

「タットガタ」の条件は「*常に私のこと“のみ”を想い、おのれの知性のすべてを私にゆだねる*」、すると結果は「*常に私の中に住む*」。重要な条件は、*マイ　“エーヴァ”*──「私に“だけ”」（＝神だけ）。しかし私たちはそうではなく、「人間、食事、服、遊び、……、そして神」というように、「私“も”」（＝神も他のものも）という状態です。

そうではなくて、神だけ！　神のほかに何も好きではない、何も欲しくない、何もいらない、Lord I want you, you only.　それが「タットガタ」です。もちろん神を見たことがない私たちにとっては難しい実践です。しかし霊的実践の、強調がそれです、神だけ！　この、マイと神は一緒です、シュリー・ラーマクリシュナと神は一緒です。

シュリー・クリシュナの育ての母親、ヤショーダーの話です。成長したクリシュナはブリンダーヴァンを離れてマトゥラに行ってしまいました。そしてヤショーダーもブリンダーヴァンの人々もとてもさみしがっていました。ラーダーはシュリー・クリシュナの女性の一番弟子ですが、本性は根本エネルギー（アッディヤー・シャクティ）［👉前回のテキストデータ］で、シーターやホーリー・マザーと一緒です。ラーダーはヤショーダーのその様子を見て、願いがあったら叶えましょう、と申し出ました。ヤショーダーは、「カーヤー、マーノー、ヴァーッキヤ」と答えました。つまり身体で（カーヤー）、心で（マーノー）、会話で（ヴァーッキャ）クリシュナを思いたい、それ以外に願いはありません、と言ったのです。［👉『ラーマクリシュナの福音』355頁、2014年版］

身体でどのようにクリシュナを思いますか？　クリシュナの弟子たちのお世話をします、そのためには身体が必要でしょう？　そしてクリシュナの信者のお世話をすれば、彼らを見れば、クリシュナを思い出します。心ではクリシュナのことを考え、会話ではクリシュナの性質について話し、クリシュナの歌をうたい、クリシュナの神遊びについて語り、存在のすべてのレベルでクリシュナを思っていたい、それがヤショーダーの願いでした。それだけが彼女の願いでした。

瞑想のときだけ「タットガタ」であればよい、というのは狭い考えです。「タットガタ」とはすべてのレベルで中心が神、ということです。だから瞑想のときにそれができなくても、瞑想のときだけ没頭できればよいとは考えないでください。毎日の生活において、すべての人格のレベルで中心は神、それが「タットガタ」の意味です。仕事の中心も神、結果も神、結果をお任せするのも神──というように、すべてを神聖化する（spiritualize）と、その結果、「カリーパダ　シュダーラダ」（*カーリーののもとなる甘露の湖*という歌の一節）、つまり、マザー・カーリーの甘露の湖に入ります。

**甘露（不死）の湖**

*もしカーリーののもとなる甘露の湖に、*

*私の心が浸ったままでいるなら、*

*礼拝や供物や犠牲供養はあってもなくてもよい。*

甘露の湖と普通の湖では何が違いますか？　普通の湖だったら泳がなければ死んでしまいますが、甘露とはアムリタ、不死という意味です（アムリタとは、否定の接頭辞アに、死という意味のムリタが付いたものです）。もし、ただ「ラダ」（湖）とだけ言うなら死ぬ可能性があります。しかし「シュダーラダ」（甘露の湖）と言うと、不死となり、ラダと正反対の意味になります。

あるときシュリー・ラーマクリシュナがナレンに、「（もし虫だとしたら）ポットの中の蜜をどのように食べるかね？」とたずねました。ポットの淵の上に座って吸うと答えると、「どうして中に入らない？」と言うので、中に入ると死んでしまいますと答えると、シュリー・ラーマクリシュナは「神の蜜のポットに入っても死にません。甘露になります、不死になります」と言いました。それが「シュダーラダ」甘露の湖です。

ウパニシャドの歌があります。

　　*シンナン　トゥヴィッシェー　アームリタッシャ　プットラハ*

*アーエーダマー二　ディッヴィヤーニ　タシュトゥ*

*メダー　アメータム　プルシャーム　マハーム　ターㇺ*

*アーディットヤ　ヴァルナム　タマースーパラースターㇳ*

*タメーヴァ　ヴェディートワー　アティ　ムリットゥ　メーディ*

*ナーンニャ　パンター　ヴィッディヤーテー　アヤーナーヤー*

「*アームリタッシャ　プットラハ*」は「私たちは不死の子供です」。覚えてください、私たちの本性は不死です。「*アティ　ムリットゥ　メーティ*」は「死を渡る」、「*ナーンニャ　パンター　ヴィッディヤーテー　アヤーナーヤー*」は「他の道はない。それだけで不死になる」。

すなわち「絶対の真理である神に「タットガタ」の状態になると不死になります。あなたの本性は不死、アムリタです」──これはウパニシャドの大きなメッセージです──「ですから甘露の湖に入ってください。するとあなたは不死になります」──みな不死になりたいですね？──「不死になるには甘露の湖に沈むしか方法はありませんから」

『福音』の今日の部分をもう一回読んでください。

（参加者）*必要なのは神に専念すること──強烈にを愛することです。『甘露の湖』は不死の湖です。*

先ほど説明しましたね？

（参加者）*人はその中に沈んでも死なないで不死になります。*

甘露の湖に沈んでも死にません。

（参加者）*ある人々は、神のことを考えすぎると気が狂うなどと言うが、それはほんとうではありません。神は甘露の湖、不死の海です。彼はヴェーダの中で、『不死なる者』と呼ばれています。それの中に沈んで死ぬことはありません。まさに死を超越するのです。*

どうしてシュリー・ラーマクリシュナはこのようなことを言ったのでしょう？　なぜならブラフモー・サマージ（ブラフマンを信奉するグループ）の一部の信者がシュリー・ラーマクリシュナのことを、神について考えすぎて頭がおかしくなっているのだ、サマーディはある種の病気に違いない、と考えていたからです。サマーディの経験がない彼らの見方はそうでした。

シュリー・ラーマクリシュナのそれに対する答えは、①世の中の人は世俗的なことを考え過ぎて頭が良い、そして私は神を考え過ぎて頭がおかしい、というのは奇妙な理屈ではありませんか？　②頭がおかしいというならば、例外なくみな頭はおかしい。しかしそれぞれ原因が違い、ある人は執着が過ぎておかしくなり、ある人は肉欲が過ぎておかしくなり、そして私は神を考え過ぎて頭がおかしい。ならば、執着と神、どちらが原因で頭がおかしいほうが良いですか？

だから言わないでください、あの人は神について考え過ぎるからあの人“だけ”頭がおかしくて、私は大丈夫、とは。そうではありません、あなたの頭もおかしくて、皆あたまがおかしいのです。でも、何が好きで頭がおかしくなるかはあなたの選択です。世俗的な原因で頭がおかしくなると、苦しみ、悲しみ、恐れ、心配という結果です。神を思って頭がおかしくなると、至福、幸せ、知識、自由という結果です。では今決めてください、どちら、何のために、あなたはおかしくなりたいですか？

インドの僧侶は、仕事をして結婚をして子供をつくるという普通の生活を放棄して出家するので、家住者から見ると頭がおかしい、というジョークがあります。もちろん僧だけではなく、ナーグ・マハーシャヤ、マスター・マハーシャヤ（Mさん）という特別な家住者の例もあります。シュリー・ラーマクリシュナの修行時代、彼の田舎の人々やドッキネッショル寺院のスタッフの間では、シュリー・ラーマクリシュナは「mad manだ（狂人だ）」という評判でした。しかし今、その「おかしい人」のインパクトはどれくらいでしょうか？　影響はどれくらいでしょう？　今わかります、神のためにおかしくなるのは全くmad ではないと。

しかし僧に対してだけでなく、信者に対してもその偏見はあります。口で直接言わなくても、土曜日日曜日にヴェーダーンタ協会やキリスト教の教会に行って奉仕をするのはおかしいのではないですか、と。他の人からしたら、レストランに行ったり遊びに行ったりしないことが「頭がおかしい」のです。なぜうちの旦那さんは、うちの奥さんは、家族と一緒に過ごさずヴェーダーンタ協会やキリスト教会に行くのだろう？　少し変ではないだろうか？

**📖『福音』４０頁下段　７行目**

*もし人が神を愛するようになれば、これらのにあまりあくせくする必要はありません。風のないあいだだけ、扇は必要なのです。南風が吹きはじめれば扇は片づけられます。そのときにはなんで扇の必要がありましょう。*

シュリー・ラーマクリシュナは励ましています。シュリー・ラーマクリシュナはいつも楽観的です。できない、無理です、難しいとは言いません。実践の最初には多少難しいことはありますが、疑わずに進めば、あとでかならず楽になると言っています。ポイントは神への愛です。それできたら楽になります。

神への愛のポイントは、あなたにだけ、あなただけ私は好き、あなただけ私は欲しい、あなた以外何も要らない、興味はない。

決して誤解しないでください。人と無関係になれと言っているのではありません。人との関係を、神と自分の関係においてつくるのです。つまり、人に神を見てお世話をするという態度、関係、生活の仕方です。

家族は恐れます、もし私の奥さんや旦那さんが神のことばかり考えたら、私のことを忘れ、私の面倒を見なくなり、私への愛もなくなるのではないかと。しかし霊性の道は、すべてを神聖化する道です。その道では家族も友人も仕事もすべてが神聖になります。だから家族との関係も神との関係においてつくられ、信者は家族に神を見て世話をするのです。ただそれだけです。面倒をみないということはあり得ません。無視（neglect）ではなく、その反対だからです。

本当の信者になると、もっともっと純粋に愛することができるようになるのです。純粋な愛をもって、尊敬をもって家族を、人々をお世話するようになるのです。見返りなど全く期待しません。しかし普通の人間関係は見返りのことでいっぱいではないですか？　見返りと執着でいっぱいです。

信者のチャレンジは、神との関係ですべての関係をつくること、それができる本当の信者になることです。僧も同じチャレンジです。もし僧にその見方がなければ、僧と信者の関係は普通の人間関係になってしまいます。普通の人間関係になったら見返りのことを考えます、すると堕落してしまいます。

「私は神以外なにも好きではない」、「中心は神、すべての仕事、すべての人間関係の中心は神」を誤解せずに、本当の理解をして欲しい。

**マハープルシャ・マハーラージ（シヴァーナンダジー）による描写**

マハープルシャ・マハーラージ（シヴァーナンダジー）はシュリー・ラーマクリシュナの出家弟子の１人で、ブラフマーナンダジーの後ベルルマトの僧院長になった方です。ある僧が挨拶に来たとき、マハープルシャ・マハーラージがこのような話をされました。今日、それをベンガル語から日本語に訳して紹介します。

──シュリー・ラーマクリシュナの恩寵によって私は理解しました。すべてがシュリー・ラーマクリシュナ、すべてはシュリー・ラーマクリシュナ、シュリー・ラーマクリシュナがすべてです──

『バガヴァッド・ギーター』でもシュリー・クリシュナが同じことを言っていましたね、すべてが私、私がすべてと。シュリー・クリシュナは彼の信者のために、シュリー・ラーマクリシュナは彼の信者のために、イエスは彼の信者のために、「すべてが私」なのです。形は別々でも、存在は１つの同じもの。形イエス、形お釈迦様、形シュリー・ラーマクリシュナ、形クリシュナ、ですけれども同じ存在。そのことをマハープルシャ・マハーラージは「恩寵によって理解した」と言っています。何を？　「すべてはシュリー・ラーマクリシュナ、シュリー・ラーマクリシュナがすべてです」。これはシュリー・ラーマクリシュナの信者のキャッチフレーズです。

当時のベルルマトにはまだたくさん自然が残っていて木々も豊かでした。続けてマハープルシャ・マハーラージはこうおっしゃっています。

──ほら、見てごらんなさい。すべてのまわりの自然は、木シュリー・ラーマクリシュナ。空（アーカーシャ）シュリー・ラーマクリシュナ。ガンガー（ガンジス川）シュリー・ラーマクリシュナ。たてものシュリー・ラーマクリシュナ。シュリー・ラーマクリシュナ以外何もない。何も存在していないです。私はそのシュリー・ラーマクリシュナを理解しました。これはシュリー・ラーマクリシュナがそのことを理解させない限り、理解できないことです。私も恩寵によってシュリー・ラーマクリシュナが私に教えてくださったのでそれを理解できました。虫シュリー・ラーマクリシュナ。物質シュリー・ラーマクリシュナ。原子シュリー・ラーマクリシュナ。すべてのすべては何ですか？　意識、チャイタンニャです。その意識の名前はシュリー・ラーマクリシュナ──

──すべては意識です。物質の中にも意識はあります。ただ寝ていてあらわれていないだけです。その中にも見えないですが意識は存在しています。それもシュリー・ラーマクリシュナ。シュリー・ラーマクリシュナは遍在しています。シュリー・ラーマクリシュナ以外何もない。シュリー・ラーマクリシュナは世界を守るために、解脱のために、シュリー・ラーマクリシュナはあらわれた。クリパー、クリパー、クリパー（恩寵、恩寵、恩寵）──

続けておっしゃいました、

──シュリー・ラーマクリシュナ以外、別の存在はありません。シュリー・ラーマクリシュナ以外私たちの別の存在はありません──そして自分の身体を指して、──私の身体の中に、シュリー・ラーマクリシュナはいます。私の身体の外にもいます──

水槽にコップを入れると、コップの中にも水、コップの外にも水、という状態になります。中にも水、外にも水、中にも神、外にも神──神以外何もないことについて、本当にマハープルシャ・マハーラージは詳しい描写をされています。神以外の存在はありません。シュリー・ラーマクリシュナ以外の存在はありません。「アット　マット　ティミ」、何回も繰り返し、シュリー・ラーマクリシュナだけ、シュリー・ラーマクリシュナだけ、と言っています。

以上

**＜Q＆A＞**

**Q）**歌の中に、*礼拝や供物や犠牲供養はあってもなくてもよい。*とあるのですが、礼拝についてはとても真剣に祈るということで、私はなくてはならないと思っているんです。*礼拝や供物や犠牲供養はあってもなくてもよい*という意味をもう少し説明してください。

**A）**最初は礼拝が必要です。実践が進んだら不必要になっていきます。ですが私たち、普通の信者のためには礼拝も必要、歌も必要、巡礼も必要、ベルルマトに行くも必要、四国八十八か所も、大仏も、護摩も必要です。ですけれども実践が進むと、「しぜんで」（と強調）最終的に「なくてもかまわない」状態になります。最終的に何もいらない。

神への愛が増えているか、いないか、その内省も必要です。

**Q）**今日お話を聞いて、すべてが神様であることを悟る…。

**A）**最初は悟るではなくて、聞いたことを頭で理解して、実践して、悟る。

**Q）**はい。では質問ですが、物質も、空も、川も神様ですよね。すべてが神様だったら、人の行動とか想いとかそういうことは、神様ではないのですか？

**A）**理解して欲しいことは、神は遍在だということです。だから悪い人の中にも神はいます。「好きな人の中には神がいる。嫌いな人の中には神はいない、悪魔がいる」と考えるのは間違いです。

しかしすべての人に神はいますが、「避けたほうがいい神がいる」というのも実践的な助言です。シュリー・ラーマクリシュナは、「すべての水を飲むことはできない、汚い水は飲むことはできない」と言いました。どのような水でも本質はH2Oですが、私たちは汚い水は飲み水と区別するでしょう？　それと同じ事です。すべての人の中に神はいますが、トラ神様やヘビ神様もいるのです。だから彼らには近づいてハグするのではなく、遠くから尊敬します。近くに行くと危ないからです。

ですが憎しみや嫉妬はしない。それが大事です。

以上

・賛歌奉献「ジャヤ　シヴァ　シャンカラ」　作　ギリシュ・チャンドラ・ゴーシュ

［＊映像の２：０６：２０頃です］

ジャヤ　シヴァ　シャンーカラ　 ハラ　トゥリプゥラーリー

Jaya Shiva Shankara Hara Tripurari

パーシ　パシューパティ ピナーカ　ダーリ

Pashi Pashupati pinaka-dhari.

シーレジャ　タ－ジュタ カンテ　カーラクタ

Shire jata-juta, kanthe kala-kuta

サーダカ　ジャナガナ　マナサヴィ　ハーリー

Sadhaka-jana-gana-manasa-vihari.

トゥリローカ　パーラカ　トゥリローカ　ナーシャカ

Triloka-palaka, triloka-nashaka

パラーッパラー　プラブ　モークシャ　ヴィダーヤカ

Parat-para prabhu moksha-vidhayaka;

カルナーナーヤネ　　　ヘーラ　バカタジャネ

Karuna-nayane hera bhakata-jane

ライエチ シャーラナ チャラネトマーリ

Layechhi sharana charane tomari.

シヴァ神に勝利あれ、幸福の授与者、三つの都市の破壊者、神槍パスパティを手に持ち、神弓ピナカは頭髪にもつれ、カラクータの毒を喉の中に抱えている。あなたは信者の心の中でお遊びになる。

三界の保護者と破壊者、至高者、そして救済の授与者でもあるお方。

憐みを持ってあなたは、あなたの御足に避難所を見つけた信者をお世話なさる。（ベンガル語）

（20201011『福音』勉強会　以上）